



「たぐひなし」と「ならびなし」の使用上の傾向(二〇一三年度卒業論文要旨集)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学国語国文学会・札幌 公開日: 2014-11-11 キーワード: 作成者: 松, 知美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00007461">https://doi.org/10.32150/00007461</a>

「たぐひなし」と「ならびなし」の使用上の傾向

国語学第二研究室 ○四九三 松里 知美

「たぐひなし」と「ならびなし」の二語は、共に程度が甚だしい様を表す語である。この二語は似た意味の語であるが作品中に両方の語が使われながら、その使用数に偏りが見られるものが多い。本研究では、この二語の使用上の要因を明らかにすることを目的とした。

そこで、ジャパンナレッジプラスの新編日本古典文学全集を用い、中古から近世までの作品から用例を抽出した。この用例について、語形による分類と被修飾語の意味による分類を行い、それぞれ考察を行った。

語形については近世に連体形で使われる割合が増えていること、語幹用法や音便形は「たぐひなし」のみに見られることが分かった。また、「たぐひなし」は感情表現や負の意味の語を修飾することが多く、「ならびなし」は人物を表す語を修飾することが多いということが分かった。

近世に連体形の割合が増えたことは、用例数の減少と共に被修飾語の意味の幅が狭くなったためであり、語幹用法や音便形が「たぐひなし」のみに見られるのはこの語に和文語彙の傾向があるためである。また、被修飾語については、時代や作品内による差は見られない。このように考えられることから、各語に修飾しやすい語はあるが作品中で明確な使い分けはされていないと考察した。